![C:\Users\zenrin\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\OYLOII2Q\MC900228485[1].wmf]()園長だより　平成２８年１１月号

　園長　平澤　正則

安全策を考える

先日の職員会議で，『門扉のすき間から出てしまった子がいたので注意しました。』との報告を受けました。

加えて，『すき間を防ぐようにするにはどうしたらよいでしょうか。』との相談が始まりました。網を張ろうか，ロープではどうか，金属の方が丈夫でいいかなど皆大変迷いました。そのすき間から抜け出した子は以前にも同じことをして注意もされたのですがその後も何回もやっており，他にやっている子もいるとのことでした。しかし，その子に限らずどの子も思いもよらないことをする可能性がありますから，危険の可能性はあらかじめ防ぐ必要があるとのことで，今回このような話題になったわけです。

　そこで改めて考えたのは，そういう対処療法的な防止法では子どもには追いつけないということです。追いついてはまた追い越されるということです。元来子どもは強い冒険心と好奇心をもちいろいろなことにやってみたさの一心で取りかかりますからその先の危険には思いが及ばないことがしばしばです。だからといって転ばぬ先の杖を必ず用意できるかといえばそうはいきません。園としてもできるだけ危険防止の策はとってきていますが，滑り台の上や途中の高いところから飛び降りはしないか，園庭のフェンスや教室の窓枠によじ登りそこから落ちたりしないかなど，考え出したら危険だらけです。世の中も同じに危険だらけであり，駅のホームの柵などないのが当り前だから電車に乗るのも危ない，道路の歩道だって柵などないからいつ車が飛び込んでくるかもわからない。地下鉄では最近視覚障害の方が命を落としたのをきっかけに安全な柵を設ける工事が始まりましたが，いつどこでどうなるかを考えれば完璧な安全策などはないといえるでしょう。大切なことは，安全策は一つ一つとってはいくけれども，他に頼る前に，頼る以上に自分自身が気をつけなければならないということです。世の大人は子どもたちにそれを教える必要があります。『何度も言った。』とか『言ったけれどきかない。』では「教えた」ことにはなりません。「きちんと教えること」に私たちは真剣に取り組む必要があります。

また，転ばぬ先の杖が必ず良いともいえません。むしろ，発達途上の子どもたちには悪く作用する危険も覚悟すべきです。転んだからこそわかる痛みやけがへの対処方もわかるというものです。他人の痛みにも気づけるでしょう。乱暴に聞こえるかもしれませんが，ある程度は転ばさなければならないともいえます。とはいえ，転ばせ方がまた難しい。「転ばせるのか」「その前に防ぐのか」，この判断をいちいちきちんとやっていこうとする努力が身近にいる大人には求められるのです。

冒頭の事例のように，抜け出た先がすぐに一般公道だとなればこれはやはり放っては置けないということで，建築の専門家にも相談した結果，今回講じた策がすき間をプランターでふさいで通れなくするというものです。これが今日の結論で，結局はできる範囲で安全策を取っていくという当たり前の結論に達するのではありますが，このようにここに至るまでの過程を保護者の皆様にもご理解いただきたく，くどくどと言ってみたくなってしまう私なのでした。

　 　 （2016.11.18）